

NPO 法人

第64号

# 芦安ファンクラブ通信

南アルプス地域の自然を愛するすべての人達に対して、地域の人々との交流を通じた南アルプスの環境保全及び適正利用に関する事業を行い、もって、南アルプス市芦安地域の活性化に寄与する。

～芦安ファンクラブの理念～

特定非営利活動法人芦安ファンクラブ 事務局 南アルプス市芦安芦倉 1578

TEL 055-288-2345 FAX 055-288-2531 HP <http://ashiyasu.com> Mail [afc3193@nus.ne.jp](mailto:afc3193@nus.ne.jp)

## 研修旅行記～鎌倉アルプス～

「海の見える春の山旅へ」

幹事 杉山 弘卓

昨年は長野県飯山への研修旅行でしたので、今年は温暖な神奈川へと足を延ばしました。

山梨を定刻通りに出発したバスは、江の島周辺の海岸道路で渋滞にはまりましたが15分遅れで建長寺へ到着。鎌倉ガイド協会の井上晃一さんと合流し、半僧坊から瑞泉寺まで鎌倉の歴史や由来の解説を聞きながら鎌倉アルプスを1日散策しました。このルートでは稜線の所々から三浦半島や伊豆半島、伊豆大島を見る事ができました。コース終点、人混みの鶴岡八幡宮近くで井上ガイドに今日の御礼を述べ宿泊地の横須賀へ移動。初日の研修は無事に終了しました。2日目は山の話から離れ、午前中に戦艦三笠が接岸してある三笠記念館の散策と遊覧船



みかさの前で全員集合

からの横須賀軍港めぐりを楽しみました。その後バスで横浜中華街へ移動しランチを堪能、夕方には山梨へ戻ってきました。ガイドさんの鼻血事件等小さなアクシデントはありましたが、参加会員さんのご協力を得て無事に2日間の研修を終える事ができました。

なつかしき古都鎌倉

大滝 要造

東京から山梨に転居して以来、本当に久しぶりに、鎌倉に来ることができました。鎌倉アルプスといわれる天園ハイキングコースは、かつて歩いたことのあるコースでしたが、思い出といえば、昼食の時に、突如後方からトンビにいなり寿司をさらわれ、あっけにとられた記憶しかなく、本当になつかしいトレッキングになりました。

古都鎌倉の歴史や風土も学び、特に鎌倉時代に生きた人のお墓である「やぐら」の史跡には、当時の人々の暮らしを思い感動しました。このコースは、鎌倉市最高地点の大平山でも159mですが、尾根道で眺望も良く、200穴以上もあるというやぐら群を観察しながらの山歩きは、とても気持ちよく楽しいものでした。鎌倉を代表する建長寺と瑞泉寺も訪れ、特に花の寺として有名な瑞泉寺は、鎌倉で一番好きなお寺で、若かりし頃を思い出しながら、心和むひと時を過ごすことができました。

横須賀では、世界三大記念艦で知られる三笠艦の見学や軍港めぐりクルーズ、そして最後に横浜中華街のランチでしめくりと、盛りだくさんの内容で、とても楽しく有意義な研修旅行になりました。



鎌倉ガイドの説明を聞く

杉山 啓子

今年の研修地は、『鎌倉アルプス』。鎌倉アルプスを歩いたからこそ研修を終えた今、自然の地形を生かした鎌倉幕府が置かれた理由が理解できる。

鎌倉の地形は南に相模湾があり、他の三方を山に囲まれた自然の要害地のようになっている。鎌倉時代は、1185年に壇ノ浦の戦いで平家が滅亡し、1192年に源頼朝が征夷大将軍に任じられ、1333年に鎌倉幕府が滅亡するまでの148年間である。建長寺から入ってしばらく歩くと、十王岩に到着。風化が進んでいるものの3体の仏像が彫られているこの岩の展望台からは、この場所が鶴岡八幡宮のちょうど真裏に位置するため、十王岩、鶴岡八幡宮、若宮大路、そして海が直線的につながれ、京の都に似せて整備されたことがわかる。そして、自然の要害である鎌倉アルプスの緑地に囲まれた市街地は、意外に狭いと感じる。

今は観光地として大変な賑わいを見せる鎌倉だが、鎌倉ガイド協会のガイドさんのわかりやすい説明で、地形から往時の武家政権に思いを馳せる研修だった。



鎌倉アルプスを歩く

石川 剛

高尾ICで降りてUターンして高速へそんな面倒を掛け恐縮して乗り込むと笑顔と共に居心地の良い場所に落ち着く、高尾から先まだ走った事が無い圏央道、右側車窓に、端正な姿の大山が望めた。ガイドさんの体調不良を聞いたが鎌倉に着いたら、ガイドさんが待って居てくれ最後まで幅広いガイドを務めて下さった。

建長寺横から入って行く天園ハイキングコース、ちょっと太めのリスが出て歓迎してくれた、道中多くの「やぐら」を見る、やぐらと言っても火の見やぐらや展望用では無く、岩に穿った穴のこと。中には頭のないお地藏さんが有ったりする。昔、小太郎尾根で掘った雪洞を思い出させる様なものも有った。

大平山(159,2m)、鎌倉の最高峰で鎌倉の町と海を見下ろした。天園峠の茶屋、うどん入りおでんに、10 cm以上も有るふろふき大根、清酒真澄が旨かった。茶屋を後に山を下り、梅の花咲く瑞泉寺、岩に掘られた庭園を見学、鎌倉宮、鶴岡八幡宮は遠くから拝礼、小町通り散策、一日良く歩きました。

バスでホテルへ向かう、夕食は魚藍亭で舟盛りを頂き、その後は自由行動、カラオケスナックで横須賀の夜を楽しみました。



無数にあるヤグラの観察

翌朝はホテルのバイキング、食後散策、横須賀は基地の町、英語圏の方々が多く、私の住む隣町、横田基地周辺と同じような、刺繍やワッペンで彩られた服がウインドウを飾っていた。

海軍の軍人だった父が寄港した横須賀で私が生まれたそうで、海岸を歩きながら流れ着いた海藻を拾ったと母に聞かされた。

日露戦争で活躍した、戦艦みかさの見学は、動画と解説で戦勝の喜びが感じられた、英国製だそうだがよく明治の頃にこのような船がと感心した。

ポートマーケットに寄りお土産を求め、バスで汐入棧橋へ、軍港をめぐる船に乗り、上手な案内人の喋りに乗せられ、潜水艦、空母等、大きな軍艦を見て回った、凄い風景だと思うが戦争に結び付かないのは平和ボケだろうか。

宿に戻り、横浜中華街へとバスに乗る、四五六采館で旨い食事と紹興酒を楽しむ、暮れのアメ横か正月の高尾山楽王院前のような混雑両側の店頭販売も満腹では食指もそそれれず早めにバスへ戻った。圏央道に乗ったら直ぐ高尾IC下りる支度を始めた。

幹事さん皆さんお疲れ様でした、今年も楽しい旅行、有難う御座いました。



横浜中華街の人混み

鎌倉アルプスを歩いてきました

塩沢 裕子

春の訪れ感じ、ツバキやキブシが咲きはじめた鎌倉アルプス」と呼ばれる、建長寺から瑞泉寺までのアップダウンの少ない天園コースを、鎌倉の歴史を感じながらゆっくりと尾根歩きをしてきました。

展望台からは遠くかすみ立った富士山を望み、近くの稲村ヶ崎や四周の山々を見ると鎌倉の持つ天然の要塞の様子が一望でき、頼朝がこの地に、幕府を開いたことが納得できます。

いつものピークを目指す山歩きとは違い、樹木に囲まれたなだらかな尾根歩きの満喫できるこのコースを「鎌倉アルプス」とはだれが呼んだのでしょうか？ガイドさんの説明だと『日本百名山』の著者深田久弥が名付親だという説がありますが、定かではないようです。

明治の時代、槍ヶ岳に登ったガウランドが飛騨山脈を日本アルプスと名付けてから、今日まで、日本各所の山岳を「〇〇アルプス」と呼ぶようになりましたが、以前登った「沼津アルプス」と同様に、鎌倉アルプスも高さだけではない山の魅力を持っているからでしょうか……。また、コース途上の茶店で食べたタワー状の大根や味噌おでんは、味だけではない楽しみがありました。

いつもながら芦安ファンクラブの研修は「山」なくしては成り立たないようです

天園コース終盤の瑞泉寺には山梨が生んだ「山崎方代」の歌碑がありました。

手の平に豆腐をのせていそいそと

いつもの角を曲がりて帰る 方代



みかさ艦上にて

鎌倉七里ヶ浜、由比ヶ浜を眺めて

渡邊 典美

鎌倉建長寺を参拝してから鎌倉山のハイキングコースに入ると、鎌倉アルプスと呼ばれるほどに眺めは抜群。その中で、半僧坊の展望台からは葛飾北斎が描いた『相州七里濱(富嶽三十六景の内)』そのとおりの位置関係で海、山、富士山が鳥瞰図そのものとなっていた。ガイドの井上さんから腰越や七里ヶ浜、由比ヶ浜や春霞の先に見える江の島の説明を受け、この腰越こそが九郎判官義経が平家討伐後に鎌倉入りを遮られ、逗留を余儀なくされて、その間に兄頼朝に宛てた腰越状を書いたとされる場所であったのだが…今は七里ヶ浜のサーフィンで賑わっていて、その若者達はイルカが群れている様にも見えた。

鶴岡八幡宮では、その参道脇に静御前処跡との標示があり、この地に囚われの身となっていて、境内の舞台上、いやいやながらも白拍子の今様

「吉野山みねの白雪ふみわけて入りにし人のあるとぞ恋しき……しずやしずしずのおだまきりかえし昔を今になすよしもなし」

と毅然にして優美に舞ったのだ。と思ったりもした。

静御前はその時すでに判官の男児を宿しており産後は頼朝の命により由比ヶ浜に水没させられたという悲劇の浜を、帰りのバスの中から眺めると、この悲劇の舞台と知ってか知らずかウインドサーフィン遊競技の若者で賑わっていて、まるで海鳥が波に戯れ羽根を広げて飛び立つまぎわの水上滑走に観てとれたのは私の時代錯誤だろうか？

「昔を今になすよしもなし」



「富嶽三十六景相州七里濱」

# 【連載】私と「山」と⑥

## ～奥秩父登山の思い出～ 芦安ファンクラブ 井口功

今回は、奥秩父の山登りの思い出をお話ししようと思います。

「奥秩父」を、東京都最高峰の雲取山～雁坂峠～甲武信岳～金峰山～小川山～信州峠までとし、派生した、両神山・ミズガキ山・黒金山・茅ヶ岳などを含んだ山塊としてお話します。

深田久弥の日本百名山に奥秩父からは、両神・雲取・甲武信・金峰・ミズガキの5山が書かれています。それぞれ日本の山岳を代表するものだと思いますが、私は、奥秩父の山々の深い森林と溪谷の美しさに惹かれるのです。そして、現在私が住む北杜市からも近く、朝目覚め、天気が良いと行き先のメモを残し、山を目指して車を走らせます。



瑞牆山

奥秩父の登山で一番の思い出は、当時まだ東京に住んでいる頃のことで、積雪が最も多いときに金峰山～雲取山まで縦走した時のことです。この縦走を完結するまでに何回ものチャレンジがありました。

1回目は、1973年3月に雲取山から3人で歩き始め、金峰山を目指しました。初日は、雲取山の避難小屋（古くて寒い）まで5日分の食料などで膨れたザックを背負いようやく辿り着きました。翌日、まず飛竜山へ、そして笠取小屋までの長い道のりに、仲間の一人が相当バテてしまい、夕食後具合が悪くなってしまいました。次の日も、彼の様子を見ながら雁坂峠まで進んだが、それ以上は無理と思われ、残念ながら下山しました。その彼は大学で山岳部に入り、4年後に蔵の助で偶然出会った時成長した姿

が頼もしく見えてましたが、その8年後、穂高滝谷で岩の大崩落に巻き込まれ亡くなってしまい、残念でなりません。

2回目は、1983年3月、6日間の予定で4人で増富温泉から雪中に入山し、踏み跡があり金峰山荘まで順調でした。次の日は、大弛峠・国師岳を越え国師のタルにツエルトを張り泊まりました。夜半から雪が降り出し朝までに結構な積雪になってしまい、翌日の目標は笹平で、激しく降る雪の中をラッセルしながら進み、夕方やっと甲武信小屋にたどり着きました。積雪が多すぎて、雲取山を諦めて戸渡尾根を經由し新地平に下山しました。

3回目（1992年3月）の金峰山越えも、雪と悪戦苦闘し、国師のタルの予定を変えて、焼山峠から塩平へと下りました。

4回目（1993年3月）は、山梨の友人の協力で車で送ってもらい、ミズガキ山荘から入山しました。今回は荷物を極力減らし軽量化を心掛けました。その日に金峰山を越え鉄山で1泊し、翌日、山梨の友人達と別れ、メンバー3人はワカンを付け、雲取山を目指しました。3人だとラッセルがはかどり、大弛峠・国師岳と順調に進み、国師のタルに泊まる事ができました。次の日も朝からワカンを付けラッセルです。甲武信岳を越えた所から甲武信小屋・木賊山までのわずかな距離に今回初めてトレースがあり、それを辿り、小屋から木賊山を越え笹平にテントを張り泊まりました。

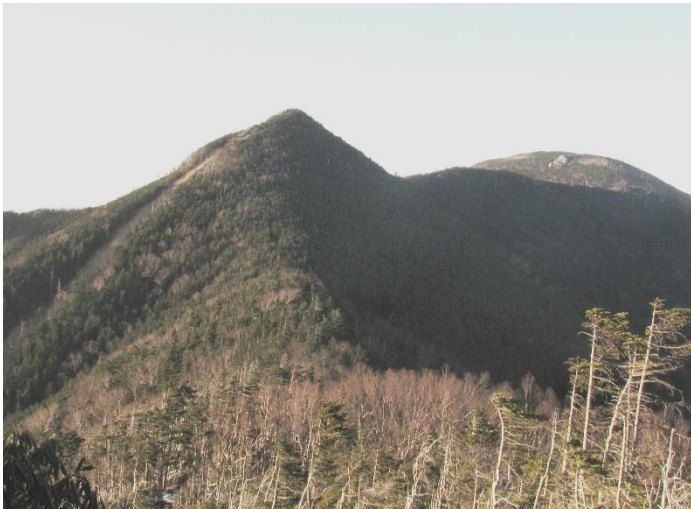


金峰山五丈岩

4日目、積雪が多く西と東の破風山と判り辛い所を慎重に進み、雁坂峠を越えて古礼山・笠取小屋を過ぎ、水の流れている小沢の畔に泊まった時の、この水のおいしかったこと！今でも忘れられません。

5日目、ここまで連日天気が良かったが、今日は今にも降り出しそうな気配のする中、ワカンをつけて歩き出しました。将監小屋の前で大休止、飛竜山に向けエネルギーを詰め込みました。その後ルンゼが氷結していて嫌らしい所を、その度にワカンを外して通過したが、三条ダルミに着いた頃からみぞれになってきました。暗くなる寸前ようやく雲取山頂避難小屋に到着しました。小屋は前年新築されとてもきれいで快適でした。テント泊のつもりで小屋のことなど考えていなかったが、折から強く降るみぞれに新しい小屋は幸運でした。

最終日、天気は回復に向かい、この山行中初めてワカンをつけず石尾根を快適に奥多摩駅まで下りました。駅前の食堂で今回の山行の成功を祝いビールで乾杯！でした。



甲武信ヶ岳

次にそれとは別に、同じ仲間と登った厳冬の笛吹川東沢の山行の話（1891年1月）をします。新地平でバスを降り、西沢・東沢の分岐からいよいよ東沢の遡行が始まりました。河原は凍結、白い氷が上流につながっていました。鶏冠谷の出会いから登山道は左岸に移り山腹を巻く道が多くなり、ホラの貝や重箱淵など白い氷と青い氷が不気味でした。途中、右岸に青氷が発達した所があり、数人でアイスクライミングの練習をしているのがあちこちで見られました。

翌日、いくつかの滝の水を登り、やがて沢は源頭

近くになり傾斜も増して結構大変な登りでした。雪と氷の沢の真ん中を、アイゼンの前歯とピッケルとアイスハンマーでどンドン登れ、気持ちの良いところでしたが、一歩も間違ふことのできない斜面がずっと続いて非常に疲れました。それから、2時間ほどのラッセルと氷登りが交互にあり、小屋が見えたときは本当にほっとしました。甲武信小屋は冬季開放されていて新も沢山有り非常に快適でした。次の日は、雁坂峠まで快晴の空の下を気分良く歩き、最終日に新地平まで予定通り下りる事ができました。

以上が私の奥秩父の山行の思い出の一部です。若い時から四季折々何回も奥秩父に入っていて、その回数は、27歳からの記録で481回になります。その内ミズガキ36回・金峰16回・甲武信13回など、沢も20数本遡行していて、特に笛吹川東沢が好きで7回・千曲川や荒川の源流など何回も遡行している沢も有ります。歳を重ねたこの頃は、沢へは岩魚釣りで行くことが多くなり、上まで遡行することが無くなりましたが、沢登りの楽しさを味わいながらの日々を過ごしています。

これからも四季を通じて奥秩父の山々を歩きたいと思っている今日この頃です。



登山教室にて(一番左が井口さん)

前回、私と「山」と(その4)カラコルム「ディラン峰」山行記として掲載しましたが、(その4)ではなく(その5)の間違いでした。井口さんと読者の皆様に訂正してお詫びします。(編集部)

## 南アルプス学講座から

# 「南アルプスの山々の魅力①」

芦安山岳館館長 塩沢久仙

「南アルプス学講座」とは、ユネスコエコパークに登録された南アルプスのことをもっと良く知ろうということで、開催されました。全 11 回の講座の中から、芦安ファンクラブの副会長でもあり、芦安山岳館の館長でもある塩沢久仙さんの講座の内容を抜粋してご紹介します。

### はじめに～南アルプスの山々の概略～

地球 46 億年のドラマチックな歴史を背負い、日本列島は約 1 万年前に現在の姿と環境になったといわれています。その中で列島の中心部に杉のつくりのような形で、北から飛騨、木曾、赤石の山脈がほぼ規則的に並んでいます。これらの中で、山梨、長野、静岡の三県にまたがる南アルプスと呼ばれる赤石山脈は、中央構造線と糸魚川-静岡構造線に挟まれ、諏訪湖あるいは一等三角点の補点のある守屋山を頂点に、南に楔状に広がり、南北の平面距離約 120km 東西は中央部で約 40km にわたり、富士川と天竜川を東西に流し、中央部に大井川を生む、わが国を代表する山岳地帯です。

この山域には、本邦第 2 の高峰である北岳と、山脈にその名を冠した赤石岳を南北の盟主として甲斐駒ヶ岳、鳳凰三山、間ノ岳、農鳥岳、仙丈ヶ岳、塩見岳、荒川三山、聖岳、光岳らの標高 3000m 級の山々が連なり、大きな山容と太古の原生林を縫うように流れる清冽な水が、いたるところに見事な渓谷美を形成し、キタダケソウに代表される、いくつもの世界的に貴重な高山植物が咲き誇っています。さらに、ハイマツと共に世界の南限に生息するライチョウやニホンカモシカ等の野生動物たちが遊び、豊で多様性に富んだ生態系が形作られています。また、甲斐駒ヶ岳や鳳凰山に見られる花崗岩の大断層崖や氷河の痕跡であるカール、周氷河地形は地球の歴史を学ぶ上でも大変貴重です。

山々がもつ様々な資源は、人間がこの世に生まれ生活してゆく上で、欠かすことの出来ない水、食料、燃料、薬草、建設資材等の実利的な恵をもたらしてくれると共に、自然が織りなす様々な景観が、豊かな精神活動を支える舞台を提供してくれます。また、時には火を噴いたり、洪水をもたらしたりする偉大な力に、神の存在を意識し、畏敬の念を抱くようになり、そこに山岳信仰が生まれたのです。このようにして人々は、江戸時代の後半までは生活のために自然に働きかけると行為と山岳信仰の二本柱で山に向かっていたと言えるでしょう。

明治時代になり近代登山がもたらされ、かつての二本柱に加えて、冒険、自然科学の研究、文学、絵画、写真等の文化活動が加わり、それらの要素が主体となり現在の登山がなされています。

このように豊かな自然と山岳文化を誇る南アルプスを国は昭和 39 年に国立公園に指定し、その自然保護と適正利用が促進され、さらに、生態系の保全と人間と自然の共生に積極的に取り組んでいる地域として「ユネスコエコパーク」に平成 26 年に登録されました。

そこで改めて、横浜国立大学の若松伸彦先生の指導の下に南アルプスの山々の自然や文化について、それぞれの山岳ごとに学びたいと思います。

# 鳳凰山

2,841m 韮崎市/南アルプス市/北杜市



地藏岳のオベリスク

鳳凰山または鳳凰三山は観音岳（2841m）、薬師岳（2780m）、地藏岳（2764m）の三山の総称を指す場合が多い。なお、地藏岳の西で観音岳の間にある高嶺（2779m）は地藏岳よりも高く、三角点もある。この高嶺と赤抜沢ノ頭、砂払岳などのピークも鳳凰三山に含まれる場合もある。地藏岳の南から西へと伸びる早川尾根は甲斐駒ヶ岳へとつながる。一番東にある薬師岳から南の稜線は急激に高度を低くし、辻山で千頭星山、甘利山方向の尾根と分かれ、夜叉神峠へと続く。地藏岳の山頂部にはオベリスクと呼ばれる巨大な岩塔があり、奥秩父の金峰山の五疊岩同様に遠方からも特徴的に見ることができる。

鳳凰山の名前に関しては、これまで様々な説あるが決着を見ていない。これは、鳳凰山がどの山を指すのかが不明だということである。これには3つの

説がある。①地藏仏ピークを鳳凰山とし、これとは別に地藏、観音、薬師があるとする鳳凰山とする一山説、②地藏仏ピークが地藏ヶ岳で、南の2つのピークが別に鳳凰山とする二山説、③地藏、観音、薬師を総称して鳳凰山とする三山説である。

明治35年（1902年）に陸地測量部がこの付近の最高点に三角点を設置し、ここを観音岳とした。しかし測量した山本米三郎自身、「点の記」に次のように書いている。「清哲村役場で調べた結果だが、薬師岳と呼ぶ者もいて、いずれが本当だろうか。入戸野では中ノ岳、農牛ノ岳と呼ぶ。」また、当時の地図には現在の地藏岳のピークに観音岳との標記があり混乱ぶりが伺える。また、「山岳」初期の頃の鳳凰山付近の写真では、現在の地藏岳を鳳凰山、観音岳を地藏岳と解説している。昔はともかく、現在の名称は鳳凰三山＝鳳凰山ということが一般的だ。

鳳凰山の名前の由来は山稜が羽ばたく鳥の姿に似ているとする説や、信仰登山の対象となっていたことから、法王山から来たという説、孝謙天皇が安産を祈願して登山したため法皇山と呼ばれるようになったという説などがある。

## 歴史

鳳凰山は南アルプスの中でも最も歴史が古い山の一つである。764年に孝謙天皇が病氣治療のため奈良田温泉に滞在した際に鳳凰山へ登頂したと言われており、それ以前から信仰登山の対象であった可能性がある。江戸時代を通じて、信仰登山の対象となっており地蔵岳や観音岳にある賽の河原に小さな石の地蔵が置かれた。現在も地蔵岳南側の賽の河原には壊れた地蔵仏がたくさんある。もちろん、甲斐国志にも様々な形で登場する。明治35年（1902年）に陸地測量部が、観音岳の山頂に二等三角点を設置した。明治37年（1904年）辻本満丸がイワシャジンの変種ホウオウシャジンを発見した。明治39年（1906年）にウォルター・ウエストーンが地蔵岳のオベリスクに初登頂しており、これが日本における初の岩登りとされている。



賽の河原の地蔵仏

## 地形地質

鳳凰山の山頂付近は甲斐駒ヶ岳同様に花崗岩となっている。花崗岩は、大きな岩が風化し壊れるといきなり砂となるいわゆる不連続風化をおこなうため、鳳凰山ではオベリスクや観音岳の山頂にみられる巨岩と、地表を埋め尽くしている砂のような両極端な粒度組成を示している。花崗岩の風化が激しい場所では厚く花崗岩の砂であるマサが堆積しており、周氷河作用により激しく移動しており条線土がみられる。辻山の北鞍部から南側は約4000万

年前～2200万年前に海底で形成された付加体となっており、この地質は早川沿いに長く南北に伸びている。また、鳳凰山の東側から辻山付近を世界的な活断層である糸魚川―静岡構造線が通っており、御座石鉱泉と青木鉱泉はこの断層上の温泉である。

青木鉱泉の下流部には奈良―平安時代に発生した大規模岩屑なだれの堆積物がみられる。この堆積物によってドンドコ沢が堰き止められた結果、上流部には湖がしばらく存在していたことが明らかとなっている。

## 動植物

ホウオウシャジンが固有種として分布する。その他にもタカネピランジが多く見られる。一方で、稜線部はザレ場となっているため、南アルプスの他の山で見られるようなお花畑は存在しない。また、ハイマツのまとまった群落も他の南アルプスの山岳に比べると少ない。稜線直下にはダケカンバ林がみられ、亜高山性針葉樹林の発達はやや悪い一方で、堆積岩の地質である辻山よりも南方の夜叉神峠方面は亜高山性針葉樹林の発達が良い。



ホウオウシャジン

鳳凰山付近では一時、ライチョウの繁殖が確認されなくなった時期があったが、平成24年（2012年）に薬師岳小屋付近で約30年ぶりに繁殖が確認された。



鳳凰山で確認されたライチョウ